
ミソジでゴメンねっ

有絵馬染奈々奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミソジでゴメンねっ

【Nコード】

N8138Y

【作者名】

有絵馬染奈々奈

【あらすじ】

三十路男にかわいい婚約者。しかも相手は・・・？ 世の口リコン諸兄に投げかける、清く正しい(?)年の差婚約ライフを描いた残念系コメディー。夢見る独身アラサー男子にこそ読んで欲しい！みたいな？

第1話(1) ～三十路男のプロポーズ～

「結婚してください！」

気がついた時にはそう叫んでいた。

何故いきなりそんなことを口走ってしまったのか――

せがみ・ときおみ
瀬上時臣

自身にも訳がわからなかった。

頭の中が沸騰していた。暴走といってもいい。とにかく、口にせずにはいられなかった。屈んだ目の前でビクツと震えた華奢な両肩をギュツと掴み、相手を見つめる視線にありったけの情熱を注いで大声で懇願する。

「結婚してください！ 俺の……いや僕の、お嫁さんになってください！」

相手は呆然としていた。それはそうだろう。こんな場所で、こんな風に、こんな言葉を向けられるなんて、夢にも思わなかったはずだから。

「僕と結婚して！ お嫁さんになって！」

無我夢中で投げかける。なんの捻りもない、直截な求婚。プロポーズ

今この時、この相手に向かって言うべきかどうかなどということは一切考えていない。まさしく衝動。脊髓反射的に、行動に出てしまったのだ。

それほどまでに衝撃的な出会いだった――少なくとも時臣にとっては。その姿を一目見た瞬間、身体中を電撃のような言いし得ぬ感情の昂りが駆け巡り、脳は完全に熱暴走している。視界が一度ぐるりと回ったかと思ったら、既に口と手が動いていた。

相手はどうだろうか。一度身体を震わせてからこっち、微動だにしていない。

周囲の空気も凍りついている。

端から見ると、なにかもがオカシイ状況だった。時も場所も場

合も弁えない、突然の異常事態。

——時は、午後5時ちょっと前。

——場所は、市役所1階のロビー。

——場合は、当時者の片方がとにかくヤバい。どうヤバいのかというと、具体的には年齢が。

二人の周りには、終業前の時間をあたふたと、或いはのんびりと過ごしていた職員たちや、用事を済ませて帰ろうとしていた来庁者が数名。皆一様にその場で動きを止めていた。

「…あ」

ほんの少しの静寂の後、ようやく脳味噌が自分のしでかしている状況を把握し始めたのか、

「ご、ゴメンね？　いきなり、こんな」

時臣は頂垂^{うなだ}れた。——なにをやってるんだ自分は。もうアホかと。バカかと。なにコイツ。一度死んだ方がいいんじゃない？

自虐で心がいっぱいになりはじめる。そこへ、

「——ん、いいですよ」

少し緊張したような震えを帯びてはいるものの、凜とした涼しげな、それでいて可愛らしい声。

耳にした言葉の——望んでいた意味合いではあるものの——その真意が瞬時には解りかねて、時臣は顔を上げた。

「は？」

「だから、いいですよって言ったんです。……お嫁さん、なってあげます」

未だ両肩を掴まれたままの相手は、緊張からか頬を紅潮させつつも微笑んでいた。その小振りの唇が再度開く。

「なって、欲しいんですね？　お嫁さんに」

「……え、あ、うん。だけど――」

いきなり自分から言いだしておいて逆に戸惑う時臣の顔をしっかりと見据え、相手はちょこんと小首を傾げた。

「それで？　あなたのお名前は？」

*

*

*

瀬上時臣32歳。

職業、武蔵玉川市役所住民課職員。

中肉中背。理知的ではあるがパツとしない顔立ち。Ray・Banのメガネをかけて粹がっているものの、オールバックにした髪の毛が生え際が割と哀しいことになっている、どこにでも居そうなアラサー独身男。

そんな彼の冴えない人生に、最近になって光明が差した。

――幼い婚約者ができたことで。

婚約者の名前は、なんじょう・えいか南城瑛花。12歳の小学6年生。

ああ、そう。そうなのだ。

割と犯罪チックなこの状況を、世間様がどう見るのか。彼も、彼女も、気にはしている。してはいるけれど、事実として婚約したのだ。

――何か文句がある？

二人はそう割り切って毎日を過ごしている。

これは、冴えないアラサー男と、その婚約者となった女のこの、割とありふれた残念な日常のお話である。

第1話(2) ～三十路男のお迎え～

私立晴玉学園は、武蔵玉川市の西側にそこそこ広大な敷地を有する、小学校から高校までの一貫教育校だ。

なんじょう・えいが
南城瑛花はその晴玉学園初等部に通う6年生。クラスはB組である。

11月下旬の金曜日。

初等部校舎の3階にある6年B組の教室は、帰りのホームルームも終わり、児童たちのざわめきで溢れていた。クラブ活動にそそくさと赴く者もいれば、楽しげにじゃれあっている男子の集団も、様々な話題に花を咲かせている女子のグループもある。

そんなクラスの空気の中で、瑛花は窓際の自席に座り、気も漫ろといった趣きで外を眺めていた。開け放たれた窓から入るそよ風に、腰まで伸びた髪がサラサラとなび靡いている。

「なあゝにボーツとしちゃってんのっ」

明るい声とともに、瑛花の頭頂部に後ろからチョップが振り下ろされた。

「……ったいわね！」

「ひひひっ。ボーツとしてる方が悪い」

「そうだね。うん。そうそう」

振り向く先には、ニヤニヤと笑っている活発そうなショートヘアの女の子と、その隣でしきりに肯いているおっとりした感じのセミロングの髪の少女。前者は智絵ちえで、後者が恋歌れんか。どちらも瑛花の親友である。

「ちよつとくらいボーツとしてたっていいじゃない。まったくもう」
溜息混じりに頭をさすりながら、瑛花は立ち上がった。智絵と恋歌の顔を順に眺めて、

「二人とも部活は？」

と問うや否や。

「ンなことより！ 今日も来てますぜえ。例の力レ」

「うんうん。そうそう。校門のところに居るみたいだよ？」

「あー。それは知ってる」

瑛花は再び溜息をついた。窓を指差し、

「だって見えてるもの。ここから」

「だったら早く行ってあげなよ。このこの！ ニクイね、こ
んちきしょーめっ。今日もこれからラブラブデートかい？ ひひ
ひっ」

「いいよねえ。うんうん。うらやましい。ほとんど毎日お迎えな
んて」

「……どう考えてもおかしいのよ。こんな時間に来られるなんて」

——どうやら冷やかされているらしい。そう感じた瑛花は、わ
ざと素っ気無く答えた。

「ホント、しょうがないヒト。少しでも長くわたしと居たいって言
って……まったく」

三度目の溜息をつき、両手をうなじへと回す。髪を左右に分け、
片方ずつ緩く編み込み始めた。

「あ。やっぱり髪型変えるんだね？ いいなあ……」

何故だかわからないが、恋歌が感動したような口調で言ってきた。
なんだか頬を朱に染め、瞳まで潤ませている。それに若干の戸惑い
を覚えつつ、瑛花は髪を手早く編み込んでいく。

「ん……。あのヒトが好きなのよ。三つ編み」

「ひひひっ。やっぱアレ？ 好きな人の好みに合わせたい乙女ゴ
コロってやつ？ ああ、ん、アナタ色に染めてえ。んっ」

「……うっさい」

「照れるな照れるなっ。ひひひっ」

ほんの少し顔を赤くした瑛花は、机に出しておいた紫のリボンに
手を伸ばそうとした。だが、それより先に恋歌がリボンを手にとる。
「おりボン結んであげる」

「ん、ありがとう」

されるがままに、三つ編みの先端付近にリボンが結えられていくのを見つめる。

「でも本当にうらやましいなあ……。うんうん。うらやましいよ。フィアンセさんがお迎えに来てくれるなんて……。なんだかお姫様みたい」

うつとりとした表情で、恋歌が窓へと視線を向けた。つられて智絵もそちらを向く。

「あゝあ。あたしもカレシ作ろっかな。年上のカレってさ、ちょっと憧れちゃうじゃん？ 頼り甲斐がありそうでさ」

「……. そんないいもんじゃないわよ。特にウチのは、ね。なにしろ20歳も上なんだから。はつきり言っ、おっさんよ。しかも甲斐性なし」

「またまたあゝ。照れ隠しもいい加減聞き飽きたぞっ」

「そうそう。そうだよあゝ。優しそうだし、甘えさせてくれるんでしょ？ うんうん」

「あのシケた顔が…そう見えるんだ。ちょっと意外」

「今度ちゃんと紹介しろよなっ。まだ一度挨拶したくらいなんだぞ？」

「うんうん。私たち親友なんだから、未来の旦那さま…ちゃーんと紹介してほしいな？」

詰め寄ってくる二人を左手で制す。その薬指には、キラリと光を反射する細身のリングが嵌められていた。

「その内…ね」

言っ、瑛花はダークブラウンのランドセルを背負う。細い楕円形のフレームレス眼鏡のブリッジを指先で押し上げて、

「んじゃ、わたしはそろそろ帰るから」

「えー！ 瑛花ちよつと冷たいぞ」

「うんうん。バイバイ。また明日」

瑛花はそれぞれの反応に右手を振って応えつつ、教室を後にした。

晴玉学園の正門前には広めの駐車スペースが設けられている。

そこには我が子を迎えに来ている親たちの車が数台止められていた。高級国産車や日本人に大人気のドイツ車に混じって、1台の英国車がある。

フロントマスクにはメッシュグリルを挟んで、やや楕円のヘッドライトが左右2つずつ並んでいる。そう、それはジャガーであった。『本物のジャガーオーナーたち』からは「罰ゲーム」だの「にやがー」だのと蔑まれている、ジャガーのエントリーカーであったX-TYPEの最終モデルだ（現在は生産されていない）。ボディはシルバー。ボンネットの先端には「それでもジャガーなんです！」とでも言いたげに、ネコ科のマスコットが鎮座している（オプションで5万円する）。

そのクルマの脇に、一人の男が立っていた。

タバコをふかせつつ、なにやらそわそわしているこの男こそ、^{み・ときおみ}上時臣である。黒のスーツに薄いグレーのシャツ。そして黒地に白い水玉模様のネクタイ。オールバックの髪型と相俟^{あいま}って、パツと見チンピラに見えなくもない。本人はビシッとキメてるつもりなのだが。

先程から数分おきに腕時計をチラチラ見やり、タバコを何本も吸っていてとにかく落ち着きがなかった。

「遅いなあ。まだかなあ。あー、早く来ないかなあ……」

独りブチブチと零している。待ちきれない様子が滲み出ている。正門から児童や生徒が出てくる度に顔を上げては落胆の繰り返し。まるで親を待つコドモか飼い主を待つ忠犬のような有様だった。

ある意味で、彼は忠犬なのかもしれない。飼い主はもちろん——
「お待たせしました」

可愛らしくも凜とした声を耳にした途端、時臣の表情がパツと明るくなった。

タバコを携帯灰皿に押しつけつつ見上げた視線の先には、漆黒のワンピース型のセーラー服を着た瑛花の姿。その幼さが色濃く残った胸許で揺れる純白のスカート、一歩進む度にヒラヒラ舞い踊る膝丈のプリーツスカートの裾をじつくりと凝視する様は、変質者のそれに近い。

「瑛花さんッ」

20歳年下の女の口に「さん付け」で呼びかけ、時臣は瑛花の傍に駆け寄った。そのままぎゅーっと抱き締める。

「ああ…瑛花さん。瑛花さん……」

夢見心地の顔つきで、瑛花の頭に頬擦りを始めた。すーはーすーはーと髪の毛の匂いを嗅ぎ、さり気なく右手は瑛花の腰の辺りを撫で回してたりもする。

「ちょ、時臣さん…ああもう鬱陶しい！いきなり抱きつかないッ」

「だつてえ」

両手で突き放された時臣は、世にも情けない声をあげた。

しゅんとするその顔を見上げた瑛花はこめかみに指を当てつつ、地面に向けて、はあくっと深く溜息をつく。

「はいはい。お待たせしました」

「すつつごく待ったんだよ？　なんでこんなに時間かったの？

ハッ……まさか放置プレイ？」

「そんなワケないです。ちよつと友だちと話し込んでただけ。気になるんなら電話くれればいいじゃないですか」

「……だつて、やたら電話すると『鬱陶しい』って怒るじゃん。メールも返信くれないこと多いし。瑛花さんに嫌われたくないし」

「はいはい、わかりました。まったくもう。どうしたあなたはそう

——ん、もういいです」

眼鏡のブリッジを指で押し上げると、瑛花は再び顔を上げた。

「もう行きましよう。周りの人が見てて恥ずかしいですから」

確かに警備員や下校中の生徒たちが、二人の様子を見ながら苦笑

していた。そんな視線を振り払うように、瑛花はジャガーに向けて
すたすた歩きだす。その背中を慌てて時臣が追った。手を伸ばして
華奢な方を掴み、

「瑛花さん瑛花さん。ただいまのちゅーは？」

「ここでしょう？」

問うが早いか、振り向きざまにひどく冷たい目で射抜かれる。

「いやだって……ただいまの、ちゅー………」

「そんな後ですッ」

瑛花は肩に寄せられた手をパツと振り払い、ジャガーの後部座席
にランドセルを放り込むと素早く助手席に乗り込んだ。アイボリー
の総皮シートに腰を落とす。

続いてあたふたと運転席に回り込んだ時臣は、シートに身を沈め
ドアを閉めるとすぐさま頬を瑛花に差し出す。

「ただいまのちゅー、ちようだい？」

「……………つたくもう」

してあげないと、延々求め続けてくることは百も承知だったので、
瑛花は少し渋った様子を見せつつも眼鏡を外した。

「ホント仕方ないヒト。——ん」

ちゅっ、と軽く頬にキス。

途端に時臣はデレデレと相好を崩した。

「ぬふふ？ あー、幸せえ〜。瑛花さん好き好き？ んー」

調子にのって唇まで突き出してきた。瑛花はジト眼になるとキス
してやった頬をペシペシと叩く。咳払いひとつ、

「ん、おふざけが過ぎると怒りますよ？」

「はあ〜い」

顔を引つ込め肩を竦めた時臣は、ふと気がついたようにボソツと
呟く。

「そついえばなんでいちいち眼鏡外すの？」

「三十路男の顔脂がレンズについたらイヤだからです」
みそじ

眼鏡を掛け直した瑛花が静かにそう断言した。時臣の肩がガック

りと落ちる。

「酷いや…」

「ほっぺにちゅーしてあげたんだから、文句言わない」

「……スミマセン。ありがとうございます」

「お仕事はどうしたんですか？」

「時間休をもらって早退しました」

「…まったくもう。そんなことでお仕事は大丈夫なんですか」

「理解ある上司と同僚に助けられています」

「あまり周りの人に迷惑かけないでください。わたしのせいで——
なんて思われたらとっても心外です」

「ごめんなさい。でもでも、やっぱり瑛花さんと少しでも長く一緒に居たいし」

「それでお仕事に差し障りがあるようなら、わたしにも考えがありますよ？」

「え、あ、いやいや……その、あの、ほら、公務員はそうそうクビにならないし」

「そんなことに甘えない」

「うう…ごめんなさい」

「まったく……あなたってホントに——ん、もういいです」

「え、瑛花さん？」

「で？ まだ出発しないんですか？」

「スミマセン。すぐ出します」

若干呆れ顔の瑛花は深く座り直すと、シートベルトを装着する。

同じくシートベルトをセットした時臣が、しゅんとなって前を向いた。「じゃあ出発しまーす」と独り言ちる。

V6気筒・2,000ccのエンジンが静かに唸りをあげ、二人を乗せたジャガーはゆるゆると走り始めた。

「…ん。今日はどうする？」

市道と都道の大きな交差点での信号待ち。

ステアリングを右手だけで握った時臣は、左手を瑛花のふとももに伸ばしながらそう訊いた。――余談だが、このクルマは右ハンドル車である。

「20号を流す？　それともいつそ高速乗っちゃう？」

時臣の趣味はドライブ。学生時代からクルマを乗り回し、暇があればあちこちと流す。大抵はこれといった目的地を決めず、気の向くままに走るのだった。「クルマを乗り回すこと自体が楽しい」とは本人の弁。最近は専ら放課後の瑛花を隣に、都下を流すのが日課となっている。

「何言ってるんですか。今日は『あの日』ですよ？　高速道路で遠出なんてしたら間に合わなくなります」

伸ばされたいやらしい手の甲をパシッと叩きながら、瑛花は視線を右に向ける。

「――まさか忘れてた、とか」

「あー。あー、そっか……」

時臣は叩かれた左手を軽く振りながら引っ込め、ガツクリと肩を落とした。表情が曇る。

「そっかあ……今月分は今日だったっけ。あー。あー。面倒だなあ」

「約束はきちんと守らないと」

「そーだよねえ。わかってるケド……さ」

「それとも――婚約解消します？　そうすれば」

「絶対イヤ！　瑛花さんと別れるなんて死んでもイヤだね！」

「だったらブチブチ文句言わない」

「はあーい」

信号が青に変わる。

時臣はアクセルを踏み込み、クルマを発進させた。その顔にはあからさまな「ちょーめんどくさ」という表情が浮かんでいる。

「まだちよっと時間余裕あるし、適当に流しながらでいいよね？」

「お好きにどうぞ」

「あーあ。瑛花さんがちゅーしてくれたら、ヤル気も出るんだけだなー」

チラリと向けられた視線を完全に無視して、瑛花は車窓を流れる夕暮れの街並みをボンヤリと眺めていた。

——気が重いのはわたしだって同じなんです。まったくもう。

なおもあれこれと理由を付けつつキスを要求してくる声を聞き流し、瑛花は小さく息を吐く。ウィンドーに映るその顔は、眉根に皺を寄せていた。

第1話(3) 三十路男と相手の実家

それまで、南城家は父・母・長女・次女Ⅱ瑛花の4人構成だった。父・英隆^{ひでたか}は苦学の末に司法試験を突破し、今では八面六臂の活躍をみせる名うての弁護士。

母・理緒^{りお}は学生時代に4年連続でミス・キャンパスに選ばれたという伝説持ちの美人で、しかも良妻賢母のお手本のような女性。

長女・瑛実^{えいみ}は瑛花の2つ年上の姉で、晴玉学園中等部でも抜きん出た才媛として注目を集めており、2年生になった今年の春には中等部生徒会長に就任していた。

そんな家族に囲まれて、瑛花は過ごしてきた。

瑛花自身も顔立ちは整っているし、学業も優秀な成績を修めている。スポーツもそこそこ熟^{こな}すし、人付き合いもいい。自立心も強く、何事にも積極的に向かっていく。平均以下で本人も割と気にしている胸の大きさを除けば、小学六年生としては申し分のない女のコであつた。

だが、家族に対して密かに思うところがあつた。

父親は娘たちを溺愛しており、ある意味過保護な面がある。特に末っ子の瑛花には「学校はどうだ。困り事はないか」と毎晩のように訊いてくる。

また姉の瑛実も妹・瑛花に対して必要以上に心配性な———といふかまあシスコンなところがあり、なにかにつけては初等部校舎に顔を出し瑛花の世話を焼こうとするのだ。「私はお姉ちゃんなんだから」と。

持ち前の強い自立心が故にそれらを疎ましく感じることもあり、そんな風に家族を疎む気持ちがあること自体、瑛花にとって悩みの種であつた。

——早く一人前になりたい。自分のことは自分に任せて欲しい。

何年も前から、常々そういう想いを抱いてきた。

家族の干渉がない、友だちと一緒にあれこれしている時間が、一番の楽しみであつた。その頃は。

「学校帰りに市役所で住民票を取ってきてくれるかしら」

時臣が『運命の日』と呼ぶ、5月中頃のあの日の朝。

母親からそう頼まれた瑛花は、放課後一人で普段まったく使うことのなかった路線のバスに乗り込んだ。瑛花の通う晴玉学園からだと市の中心部に位置する市役所よりも、西部住民サービスセンターの方が近い。そこでも住民票を取得できるということは、後に時臣から教えられるまで知らなかった。小学生がそんなことを知らなかったとして、何の不都合もないのだから。

まあとにかく。

母親の依頼通りに市役所へ着いたはいいものの、住民票なるものはどこに行けばもらえるのかが皆目見当がつかない。さらに運の悪いことに、入口脇の案内カウンターが無人だつた。

困つて視線を巡らしていたところ、近くの自販機で緑茶のペットボトルを買い終わつた様子の職員を見つけ、声をかけたのだ。

「あ、あのつ。住民票ってどこでもらえるんでしょうか？」

その相手こそ、今の彼女の婚約者であつた。まさか直後に「結婚してください！」などと言われるとは思ひもよらなかつたが。

衝撃的な——或いは笑劇的な突然のプロポーズを受け入れた理由の中に、『結婚すれば——婚約者ができれば、家族も自分を一人前として扱ってくれるのでは』という想いがあつたのは確かだ。

「玄関前で何を騒いでおるのかと思えば。瑛実、はしたないぞ？」

「……お父さん」

三人分の視線を受けたその漢は、瑛実の手から金属バットを取り上げると、瑛花を見据えて二カつと笑う。

「瑛花。一月ぶりだな。相変わらず可愛いのう」

「お、お久しぶりです……お父さん」

瑛花は少し緊張した面持ちでペコリと頭を下げる。

その後ろで肩で息をしている時臣は、青ざめた顔を巨漢に向けた。
「た、助かりました……南城先輩。危うく娘さんに殺されるところでしたよ」

「ぬははははっ！ お前も元気そうだなによりだな、瀬上よ」

「きよ、恐縮です」

「まあ立ち話もなんだ。さつさと上がらんか」

巨漢——南城英隆は、ぬはははは！と笑いながら、ゴツい手で瑛花の頭を撫でた。

南城宅のリビングには、背の低いテーブルを囲うように大きな皮張りのソファが3つ置かれていた。

その真ん中のソファに英隆の巨体がどっしりと座り、彼の右手側に瑛実が、左手側に瑛花と時臣が座っている。

「母さん！ 早おせんか！」

野太い声が轟くのと同時に、

「はいはい、ただいまあゝ」

という返事とともに、妙齢の女性が大きな盆を抱えてやって来た。盆の上にはポットに急須、人数分の湯飲み茶碗が載っている。

「はい、お待たせ」

どう見ても女子大生くらいにしか見えない若々しい女性は、こう見えても二児の母。南城英隆の妻・理緒である。

彼女はさも当然のように英隆の太い膝の上に腰を下ろし、お茶の

準備を始めた。淀みない手つきの合間に顔を左手へと向ける。

「お久しぶりですガミ先輩。それに瑛花ちゃん」

「理緒ちゃんも元気そうで」

「はい、お母さん」

英隆34歳と理緒31歳の夫妻、そして時臣は、彼らの母校・命路大学で同じサークルの先輩後輩の間柄であった。

それもあつてか、瑛花に連れられて時臣が始めてここを訪れた際も、邪険にされることはなかった。来訪目的が非常にアレであるにも関わらず。

瑛花との結婚を前提とした交際——というかもう結婚するための婚約を申し出た時臣に対し、理緒は諸手を挙げて賛成。英隆の方は暫し熟考した後、「承諾してもいいが条件がある」と告げた。その条件というのが、

- 一、毎月必ず二人揃って南城家に顔を出すこと。
- 一、瑛花を決して泣かせぬこと。
- 一、瑛花が16歳になるその日まで決して肉体関係に及ばぬこと。

というものであった。

婚約する以上半端なことは許さんから、瑛花は時臣と同居すべしという付帯条件まで出された。

但し「この条件を遵守できなかった場合、ワシは被告人席に立つことも辞さぬ」〓貴様をブチ殺す、と真剣な表情で約束させられたのだ。

今日ここへ来ているのも、この約束のためであった。

「しかしまあ、みなさんお元気そうだなによりです。ははは…」

時臣が乾いた笑い声をあげる。場の空気が重いのだ。

主な原因は、対面でこちらを睨みまくっている瑛実である。彼女は時臣を「可愛い妹を奪い去ったロリコン変態野郎」として敵視し

ており、両親の手前大人しく座ってはいるが、少しでも時臣が瑛花と仲睦まじい様子を見せようものなら殺すぞ——と鋭い眼差しでそう主張していた。ちなみに空手二段の武闘派だったりする。先程金属バットを用いたのは、おそらく怒りで我を失っていたからだろう。それが逆に幸いだったのだが。

さらに場を硬直させているのが、南城家の主のぎこちない状態だ。色々と言いたいことや訊きたいことはあるのだろうが、英隆は「むう……」とか「ぬ……」などと口走っては黙り込んでいた。その視線の先には緊張気味に堅くなり俯いてしまっている瑛花。愛娘のこのような状態に、どう言葉をかけたものと迷っている様子であった。英隆の膝に乗っている理緒は、ただただニコニコ微笑むばかりで、助け舟ひとつ出してくれそうにもない。夫を立てて、自分が出しゃばるつもりはないのだろう。

必然、この場では『媚殿』であるところの時臣が気を利かせて動かなくてはならない状況だ。だが隣で堅くなっている瑛花が気になつて気になつて、市役所勤めで培ったハツタリ対人友好モードも発動できずにいた。

（あー、なんなのこれは。瑛花さんどうしちゃったんだろ？ まさか生理か……っていやいやまだ何日か先のはずだし。ってか今日は金曜だぞ金曜。金曜の夜つてのは明日明後日の休みに向けて、瑛花さんとイチヤチャして気分を盛り上げるべきだろうが。なんだってこんなトコでこんな。なにになになんなのこの空気。あー、早く瑛花さんとの愛の巣に帰りてえ……）

時臣の頭の中はこんな具合であった。

5分だろうが、10分だろうが。しばらくの沈黙の後、不意に英隆が体を揺すった。顔をズイッと瑛花の方へ向け、

「瑛花」

と重く呼びかける。

肩をビクツと震わせた瑛花は、俯いていた顔を上げて応えた。

「はい、お父さん」

「お姉ちゃんうるさいッ！」

瑛花がキツと睨みつける。

「お姉ちゃんにも関係ないでしょ！　こ、こういうのは夫婦の問題なんだから！」

「ふふふ、夫婦ですつてえええええええええええええええええッ？！　むつきやああああああああああああああああああ？！！」

精神に多大な影響を及ぼしたのか、瑛実は両手で頭を抱えるやその場でグルグルと回転し始めた。

「もう帰ります！　さようなら！」

時臣の腕を引っ張りながら、瑛花はそう吐き捨てる。

「あらあらまあまあ」

終始にこやかな表情の理緒は右手を振って二人を見送っていた。瑛実はグルグル回り続けている。

そして、英隆は白眼をむいて気絶していた。

第1話(4) ～三十路男の大ハッスル～

帰りの車内では、瑛花は終始不機嫌そうに押し黙っていた。

時臣も声をかけられず無言。

そして二人は、武蔵玉川市の南端地域・玉川南新町にある自宅マンションへと帰っていた。

ザーツというシャワーの水音が、時臣の耳に蠱惑的に響いてくる。現在、二人は夕食を済ませ、夜のくつろぎタイムへと入っていた。とはいっても、未だ不機嫌そうな瑛花は「お風呂入ります」と告げてバスルームに居る。

二人の間では、一番風呂は瑛花と決まっていた。「あなたの後に入るのはちよつと……」と瑛花が最初に言ったからでもあるし、時臣の方からも「瑛花さんが先に入る方が断然いい」と主張したためでもある。

若干12歳ながら、瑛花は家事全般をそつなくこなせる。当然食事も基本的には瑛花の手料理だ。なにしろ時臣は家事はからつきしダメ。独り暮らしだった頃は、コンビ二弁当が常だった。

こうなつてくると、二人の関係は自然と瑛花が主導権を握る形となつてくる。食を制する者が強いのは当然なのだ。事実、時臣は瑛花に頭が上がらない。というよりも、ぶっちゃけ尻に敷かれているのだった。そしてそれは、彼にとって最大に望む在り方でもあった。

——年下の女の尻に敷かれない。叱られたい。甘えたい。

思春期に入る頃から、長年そう願ってきたのだ。その夢が——いやさ心願が、20年以上の時を経てようやく現実のものとして自

分の手許にある。これを幸福と言わずに何であると言うのか。

それはさておき、今の時臣は脱衣場にいた。

曇りガラス戸の向こうには、一糸纏わぬ瑛花がいる。それを覗こうとしているのか？

答えは否。

瑛花と同居を始めてそろそ半年になるが、入浴シーンを覗き見たことはたった一度きり。すぐさまバレて、その後二日間に渡って一言も口をきいてもらえなかったため、覗きは二度としないことにしている。——ちなみに、その時は泣きながら土下座を2時間し続けてようやく許してもらった。

今、彼がここにいるのはさらに高尚な——と本人は考えている——とある極秘作戦の為であった。

足音をたてないよう慎重に歩を進め、洗濯機に辿り着く。そつと蓋を開けると、中には瑛花の下着類が入っていた。先程まで瑛花が身に着けていたパンツとブラジャー。それがお目当ての品だ。

慎重に慎重を重ね、ゆっくりとそれらを取り上げる。薄いピンク地にレースのリボンが愛らしく備わった上下お揃いのパンツとブラ。これは時臣が瑛花にプレゼントした数々の下着類のひとつだった。

かわいく愛しい幼き婚約者に、自分好みの下着を着けて欲しい——

——それは男子たる者として当然のこと。そういう信念の下で、瑛花が下着を買いに行く時は必ず同行している。時には内緒で買っておき、何かの記念として渡しているのだった。

（ぬふふ？）

右手にパンツ、左手にブラを持つと、にんまりほくそ笑む。そして徐ろに、パンツを口に含んだ。

「もぐもぐ……」

ああ——変態である。

被るならまだしも、口で味わっているのだ。それも恍惚の表情で。……ふむ。一昨日より少し味が濃くなってるな。——あ、もう

すぐ生理か。ぬふふ？」

独り言ちるその様は、とにかく変態。それ以外の何者でもなかった。

瀬上時臣という男は、女のコの衣類フェチである。

パンツやブラに留まらず、ソックスだろうがブラウスだろうがスカートだろうが、女のコの衣類は彼の大好物。新品だって、それが女物であれば布地の匂いを嗅ぐだけでハアハアしてしまう類たぐいのフェチ。それが今、愛する瑛花の着ていたものを手にしているのだ。

これはもう、歯止めなど利きようはずもない。

パンツを甘噛みしながら舌で丹念に舐めあげつつ、時臣は予め用意しておいた全く同じパンツとブラを洗濯機の中に放り込んだ。これは新品である。洗濯物の中から自分の下着が無くなっていたり、または歯型らしき跡や妙に唾液っぽいものの跡が残っていたら、瑛花は何が起こつたのか即座に察するだろう。そうなると、とてもよろしくない事態に発展してしまう。なので、それを回避しつつ、使用済みのものを確実に入手するための偽装工作。

彼がやっていることは、つまり、瑛花の使用済み下着を延々手に入れるという、名状なづかし難い変態作戦なのだ。

ひとしきりパンツを堪能した後、今度はブラを味わいにかかる。

こんな行為はそれこそ隠れてやればいい、と思われるかも知れない。

しかし時臣にとっては鮮度こそ最重要。場所を移すまでに時間がかかった分だけ、瑛花成分が薄れてしまう。そんなもつたいたいことと許されようか。いやいや、そんなオカルトありえません。つまりはそういうことだ。

加えて瑛花は入浴時間が長い。これは半年に及ぶ同居生活の結果、確実な話であった。

よってこの脱衣場なるべく新鮮な瑛花成分を堪能することがベストである——ということなのだ。

「あゝ？　瑛花さん……？」

小振りなカップのブラをもぐもぐしながら、先程まで味わっていたパンツに頬擦りする。

「瑛花さん瑛花さん瑛花さん……？」

一方、バスルームでは長い髪と身体を洗い終えた瑛花が、その幼さが残る肢体を浴槽に沈めていた。

お湯は無色透明。何かしら入浴剤を混ぜたいと瑛花は思っているが、時臣が断固反対するのだ。理由は不明。問い詰めれば明かすだろうが、敢えて追及もしていない。

——まあ身体が温まればそれでいいか。

そう思うことにしている。

「ふう……」

肩まで湯に漬かり吐息を漏らしながら天井を見上げる。

（——今日は失敗したなあ）

額にかかる前髪を後ろに撫でつけながら、そう振り返っていた。

（まさかあんなこと言われるなんて……。急にどうしたんだろ、お父さん。今まではあんなことなかったのに。ああ……。でもわたしも大人げなかったな。あそこは軽く受け流すくらいじゃないといけなかったんだろうな……。きつと。でも、そもそも時臣さんが止めてくれればよかったのに。もう……肝心な時に頼りないんだから。わたしのこと引き留めて、窘めるくらいできないのかしら？……。ってムリか、な。わたしの言いなりだもんね、あのヒト。わたしに一目惚れして、わたしのことが好きで好きでどうしようもなくって、嫌われたくない一心で言いなりで、優しくて、甘い。そのクセ甘えてくるんだから……）

黙考しつつ、ふと、自分の慎ましい胸に視線を落とす。

お湯に火照ったんだらかな双丘に手を当ててみる。ふにょんという感触。クラスの女子の中では平均より少し小振りな自分の胸。敢えて口には出さないし、そんな素振りを見せたこともないが、結構

気にしていた。発育が遅い、と。

（やっぱり…もうちょっと大きくなってもいいと思うのよね。女の子なんだし）

ひとしきり胸をまさぐってから、ハッとして首を振った。

（なにやってんだろ。すぐに大きくなるわけないじゃないッ）

顔を赤らめて、立ち上がる。

「あー、もう出よっ」

パジャマに着替え、髪をタオルで拭きながらリビングに戻った瑛花は、ふとした違和感を覚えた。

普段なら忠犬八チ公のように自分の湯上がりを待っている時臣が居ないのだ。「湯上がり瑛花さんほかほかいい匂い〜？」などと言つて、抱きついてくるはずなのに。

そうしたスキンシップ——瑛花にしてみればセクハラ紛い——は、日常茶飯事だった。同居したての頃はその都度、頬を引つ叩いたりグーでぶん殴ったりしていたが、最近はある程度なら許すようになった。引つ叩こうが殴ろうが、実は時臣は悦んでいるのが解つたのと、構ってやらないとウジウジいじけるのが鬱陶しいからだ。そんなセクハラ大好きな時臣が、何処にも居ない。

訝しんで視線を巡らすと、ベランダに続くガラス戸のカーテンが開いていて、その向こうにほのかな赤い光が見えた。

「……まったくもう」

はあ〜と溜息ひとつ。

状況を察した瑛花はすたすたとベランダに向かった。

「ぬふふふふ〜ん　　ぬふふふふ〜ん」

ベランダには案の定、タバコを喫っている時臣が居た。何故か上機嫌で、紫煙を燻らせながら鼻歌混じり。その背に向けて、

「時臣さん」

静かに声をかける。

即座に反応。時臣はくりと振り向き、「ほかえり、瑛花さん？」
と言ってきた。自分の頬を指差して、

「お風呂上がりのちゅー？は？」

「そんなのありません」

「そっか」

顔を別の方向へ向けて、ふーっと紫煙を吐き出した。

瑛花は腰に手を当て、そのニヤけ面をジト目で睨む。

「タバコ、まだ止められないんですか」

「あ…ははは。こればかりは、ねえ？」

「カラダに悪いから止めてくださいって、わたし何度言いましたっけ？」

「いやいやいや…あははは」

「あなた、わたしの言うことなんでもきくって言いましたよね？」

「いやいやいやいや…こればかりはなんともかんとも」

「まったくもう…」

嘆息混じりに隣に並ぼうとすると、

「…っといけない。俺もお風呂入っちゃうねっ」

何故かそそくさと携帯灰皿に喫いかけのタバコを押しつけ、横をすり抜けて行った。

その背を目で追いつつ、瑛花は深く溜息をつく。

「ホント…しょうがないヒト」

——さて。

時臣にとって一日の内で最もエキサイティングなシーンがやってきた。

素っ裸でバスルームに仁王立ち。その手にはコップとタッパー2個、そしてピンセットがあった。ちなみにナニは年甲斐もなくピンビンである。

めちやくちや真剣な面持ちで浴槽の傍に屈むと、持っていたものを縁にそつと置く。数瞬じ…つとお湯を凝視。

そして徐ろにお湯をコップになみなみと掬い上げるや、何の躊躇いもなく一気に飲み干した。

「……ぷはっ。美味しい」

瑛花の残り湯。

それは彼にとつて至高飲み物のひとつなのだ。

さらに何杯かわかりをして、恍惚の笑みを浮かべた。

「瑛花さんエキスが染み込んだ残り湯サイコー！」

天井を仰ぎ見て小さく叫ぶ。

その後、再び浴槽の中に目を凝らす。何かを探すように視線はあちこちを彷徨い、右手にはいつの間にかピンセットがあった。

「発見ッ」

言うが早いか右手をお湯に突っ込み、素早く取り上げる。

ピンセットの先には、淡い縮れ毛が1本掴まれていた。

「瑛花さんの大人毛ゲット！」

嬉しそうちにそう言い放ち、これまた躊躇いもなく口に放り込む。

しばらく舌の上で転がすようにじっくり味わってから飲み下した。

「瑛花さん？　なんて美味しい……」

それから眼を爛々と輝かせ、湯の中の抜け毛取りに没頭。淡い大人毛4本と、長い髪の毛6本を収穫した。それらはすぐには食べずに、種類ごとに別のタッパーに仕舞っていく。2個持ち込んでいるのはこのためだった。

「ぬっふふっふっふん」

上機嫌になって目を瞑った。やおら顔面をお湯に突っ込む。

そのまま直接残り湯をごくごく飲みだした。

たっぷり堪能すると顔を引き揚げ、額に垂れた前髪を掻き上げる。

「さて、と。お次は……」

今度は視線を排水口にロックオン。ピンセット片手ににじり寄り、蓋を取り上げた。

そこにはやはり長い髪の毛が何本も絡みついている。丹念に1本ずつ外していき、頭髪用のタッパーに仕舞い込む。

全ての毛髪を回収し終わると、額ににじんだ汗を手の甲で一拭き。

これで変態行為もお終いだろうか――？

――甘い。

ここまででもまあ充分に変態なのだが、瀬上時臣という男には更なる任務が――漢^{オトコ}の使命があるのだ。

そのいやらしくも破廉恥な視線が、お次はアクリル製の黄色いバスチェアに向かう。

「瑛花さんの可憐なお尻が座ってた――ゴクリッ」

這い寄るや両手に掲げ持ち、その座部表面を舌でベロンベロン舐め回し始めた。鼻息も荒々しく、だらしなく突き出された舌の動きは雄々しさ満点。アレの方も呼応するようにビクンビクンと脈打っている始末。

「ハアハア…おいちいよぉ？　おいちいおゝ瑛花さゝん？」

4～5分程隅々まで舐め回した後、時臣はフッと何かを決意したような真剣な眼つきになった。

まじまじとバスチェアを眺める。その座部には水抜き用の穴が空けられていた。直径は、そこそこある。

穴の大きさに、問題は、ない。

「瑛花さん……」

静かに呟き、そつと瞼を閉じた。

その脳裏には以前一度だけ覗いた時の、瑛花の初々しい裸身が浮かんでいる。

「……ふくらみかけおっぱい……かわいいおへそ……眩しいふともも……キュッとしたお尻……きゃわゆいアソコ……」

バスチェアを胸に抱いて上体を反らす。アレがビクビクと強く脈打ちを繰り返している。

しばらくそうしていて、やおらカツと眼を見開いた。

「い、いいよね？　最近全然してないし……」

本人の名誉——そんなものがあればだが——の為に添えておくと、瑛花と同居を始めて約半年。その間、彼女が留守の隙をついて、何度か『処理』はしていた。三十路といえば、まだまだ働き盛りの男盛り。色々とアレがナニなのだ。

本来ならばかわいい同居人にして婚約者に『手伝って』欲しいトコである。なにぶん相手はまだ12歳。思春期でしかも好奇心も旺盛なお年頃だから、何とか言い包めてしまえば、『本番』までとはいかなくとも、ナニかしの『ヘルプ』をしてもらえる可能性はなくもない。

だが、ほっぺにちゅーはしてくれても、それ以上の行為は基本NG。瑛花は賢いコなので、言い包めることも難しい。無理強いしたりして口をきいてもらえなくなったり、最悪嫌われたりしたら本も子もない。

更に、時臣本人がとにかく瑛花を非常に大事に想っている。べた惚れで、首つ丈なのだ。ロリコンと言われればそれまでだが、ロリコンであるが故にまだまだ子供な彼女を下手に傷つけるようなマネはしたりしない。20歳年上のオトコとして、瑛花には真っ直ぐに成長して欲しい——心からそう願っている。

まあ、おっぱいは今のままでいい。というか、これ以上の発育は望んでいない。ダメ、ゼツタイ。

そういう訳で『処理』は自前で行っていたのだが、ある時を境に今日この日まで一切やっていなかった。

——瑛花にバレた。

今の瀬上宅の家事全般を一手に引き受けているのは瑛花だ。ゴミ捨て程度は時臣もするが、部屋の掃除は瑛花任せだった。それが災

いしたのだ。

念には念を入れて隠しておいたエッチな写真集やらDVD、そしてゴミ箱にすっかり放置してしまっていたイカ臭い丸めたティッシュの塊。それらを発見され、どういうことを行っていたのか洗いざらい事細かに白状させられたのだ。

全てを聞き終えた瑛花は、顔を真っ赤にして一言。

「これは浮気です」

今回だけは大目に見るが、次にこんなことをしたら即刻別れて二度と会わない。

そう宣告されていたのだ。

なのでここしばらく、時臣は『処理』を一切行っていない。それだけならまだしも、かわいい幼婚約者が同居しているのだ。悶々としなない訳がなく、かといって瑛花の言いつけを裏切れず——そう、溜まりに溜まっているのだ。実はもう決壊寸前。

ゴクリ…と喉を鳴らす。

視線はバスチェアの穴に吸い寄せられ、脳裏には瑛花のあらわな肢体。

「い…いいよね？　ひ、必要なコトなんだし。それに浮気じゃないし。そそそ、そうだ。これは浮気じゃない浮気じゃない浮気じゃない浮気じゃない浮気じゃない浮気じゃない——」

ブツブツ呟き、そして激しく自己主張しているアレとバスチェアを交互に見やる。

「——瑛花さんッ」

バスルームの曇りガラス戸が少し開かれた。その隙間からおずおずといった調子で、

「あの…時臣さん？」

瑛花の声が小さく響く。

「ずいぶん長いですけど……大丈夫ですか？」

「……………あー。大丈夫だよお」

浴槽の中で妙にツヤツヤとした顔の時臣が、ふやけたような様子で応えた。

「心配してくれてありがとう。もうあがるから」

「そうですか？　ならいいんですけど」

戸を閉めながら、瑛花の声が少し硬くなった。

「ん…あとでちょっとお話があります」

「はいはい」

脱力気味に返事をした時臣は、ぬふふ？つとニヤけた。

第1話(5) ～三十路男と幼婚約者の距離～

「瑛花さんお待たせ？」

寢室のベッドに腰掛けていた瑛花の目の前で屈み、時臣はふんわりと抱きついた。両手を背中に回して顔を瑛花の胸許に寄せる。

「あゝ？ いい匂い？ それにふにふに？」

そのまま胸に頬擦りを始めた時臣の頭上から、

「——あとで目一杯甘えさせてあげますから、ちょっと座ってください。お話があります」

硬くなった声が降ってきた。

未練たらたらといった顔をしたものの、瑛花の胸から顔を離して腕も解いた。

解放された瑛花はベッドの中央部まで身体をずらし、そこに正座する。

つられて、時臣もベッドに登りその対面の位置に正座した。上半身を気持ち前に傾けて口を開く。

「それで？ お話って？」

「……………」

返事はなく、瑛花は表情までも硬くして俯いてしまった。

「ふむ……」

瑛花のこんな態度はこれまであまり見たことがなかった。まるでこれから親に叱られるコドモのようだ。

普段であれば、こういう場面では時臣が叱られる。大抵は「いつまでお尻触ってるんですかッ」とか「スカートに潜り込もうとするなって何度言えばわかるんですかッ」といった具合だ。

だが今夜はそういうことではないらしい。

先程風呂場で『久しぶりにスッキリ』したためか、時臣には心の余裕がある。瑛花が口を開くまで待とう——そう思った。

壁掛け時計の秒針が回る音だけが静かに聞こえる寝室。

しばらく黙っていた瑛花は、ようやく意を決したのか、顔を上げて背筋を伸ばした。

硬く口を結び、真正面から時臣を見据える。その顔は若干紅潮していた。

「時臣さん」

「ん？」

「今日はごめんなさいでした」

そう言つと瑛花は、折り目正しく三つ指をついて深々と頭を下げた。

「今日は失敗でした。月に一度の実家訪問であんな風になっちゃつて。本当にごめんなさいッ」

額をベッドに押しつけて、絞り出すように言葉を続ける。

「まさかあんなこと言われるなんて思つてなかったの。お父さんつたらなんであんなことを。わたしはもう……あなたのお嫁さんなのに。確かにまだ子供ですけど……コドモじゃないんです。なのにコドモ扱いでしかもあんな……あんなこと。だから、ついカツとなっちゃつて」

「瑛花さん顔を上げて」

「……はい」

少し涙ぐんだりしてるのかな？——という時臣の予想とは異なり、頭を上げた瑛花の表情には悔しさが滲んでいた。

「わたし……なんだか腹立たしくつて。婚約者ができて、お父さんやお姉ちゃんはまだコドモ扱いのままで。あなたの面倒だってちゃんとみてるし、来年は中学生なんですよ？……もうコドモじゃないんです」

言いながら瑛花の頬が徐々に膨らんでいく。

言つてること、その態度も、明らかにコドモそのもの。

だが時臣はそうは思わない。一所懸命自立したがっているんだな

——と。さらには愛しささえ感じていた。可愛らしいレディだ——と。

「うん。瑛花さんはコドモじゃない。ちゃんと俺のこと面倒みてくれているもんね。お嫁さんとして」

「え、えっちなこと以外は……」

「そっちも面倒みてくれる？」

「ダメに決まっていますッ。……ってそういえばお父さん。あのままで帰ってきてちゃったから——もしかしたら勘違いして、婚約解消しろって言うてくるかも」

「大丈夫だよきっと」

時臣は膝を瑛花に寄せ、ぎゅっと抱きしめた。その耳元で静かに言う。

「大丈夫。南城先輩も瑛実ちゃんも、瑛花さんのこと信じてるって」
「でも……お父さんもお姉ちゃんも、わたしのことになると時々見境無くなりますよ？」

「なははっ。ま、大丈夫だよ。俺が瑛花さんの許可なしに無理矢理えっちするなんて出来っこないって解ってると思うよ。だから大丈夫。瑛花さんがしつかり者だから、きつと信じてもらえてるって」
安心させるために、時臣は瑛花の背中をポンポンと軽く叩いてやる。

悔しさとは別の理由でますます頬を赤らめた瑛花は、珍しくされるがまま。時臣に身を委ねていた。

「ん……そうですね。わたしがしつかりしてれば、大丈夫ですよね」
「そうそう」

優しい旦那さまモードを装いつつ、時臣は内心でニンマリしていた。

（もしかしたら……今夜はちゅーまでいけるんじゃない？）

無論ここで彼が目論んでいるのは、口づけのことだ。ほっぺにちゅーは数あれど、実はキスは一度させてもらったきりなのだ。

（もうちょい頑張れば——イケる?!）

そんな相手の邪念など露知らず、瑛花は時臣の胸許に額をつけた。
「この際なんで言っておきますけど」

「ん？」

「わたし、最初はあなたのことなんてどうでもよかったんです」

「——え？」

「ただ単純に、誰かと結婚するって、そう言ってみれば、お父さんもお姉ちゃんも、わたしのことを一人前として認めてくれるんじゃないかなって。そう思っていました」

「えーっと……」

時臣の頬を冷や汗が伝う。薄々感じてはいたものの、こうもハッキリと口に出されると痛かった。

だが——

「で、でもさ。今はどうなの？ 嫌いじゃないでしょ？ ほっぺにちゅーだっけてしてくれるし、こうやって抱きしめても——」

「んふふ……」

瑛花の顔が少し浮いた。口の端に笑みを浮かべて時臣を見上げ、
「だんだん……好きになってます。この気持ちが『愛』なのかどうかは正直わかりません。だけど……あなたと一緒にいるの、キラリじゃないです」

少し意地の悪い口調でそう言った。

時臣は微妙に泣きそうな情けない顔で瑛花を見下ろす。

「ほ、ホント？ こんな三十路のおっさんでも、いい？ 本当

にお嫁さんになってくれるの？」

「ふふ……。情けなくないんですか？ 20歳も年下の、こんな子供相手にそんな顔して。生意気って思いませんか？ こんなこと言われて」

「お、俺は一度だって瑛花さんを子供だなんて思ってもないし」
「わかってます」

瑛花が嬉しそうに微笑む。

その笑みの愛らしさといったら。時臣の心を鷲掴みにするには充分だった。

「あなたはわたしのことをコドモ扱いしたりしない。わかっています。そういうトコ、好きです」

「俺はホントに、真剣に、心から瑛花さんが好きだよ？　愛してる」

「初対面でプロポーズした一目惚れのクセに？」

「あああう……」

「ちよつと意地悪が過ぎましたね。ごめんなさい。わかっていますから。毎日あなたが注いでくれてる愛情は。でも……」

「でも？」

先を促す時臣に向け、ここで満面の笑み。

もしかしたら瑛花は計算尽くなくのかも知れない。

「まだまだ足りない感じ。もっともつと愛してくれないと、わたしの全部……あげる気になれませんね」

「これでも精一杯愛してるつもりなんだけど」

「じゃあ諦めます？」

「それはナイ」

「だったら頑張ってわたしをオトしてください。わかっていると思いますけど、先に好きになった方が負けなんです。だから、あなたはわたしに負けたんです。わたしの勝ち。んふふ……っ」

「そ、それは重々承知しております」

ガックリと肩を落とした時臣の右頬に、

「ホント……しょうがないヒト——んっ？」

瑛花の唇がそつと触れた。

しばし呆然の三十路男は、ハツとすると瑛花の両肩を握り締める。

その鼻息が徐々に荒くなっていた。

「え、瑛花さんッ。最っつ高の愛情表現をしたくなっちゃったんだけどッ。いいかな？　いいよね！　二人のヒミツにしとけばいい

いんだしッ」

もう辛抱たまらんとばかりにそのまま押し倒した。

途端、パシーンっと小気味良い音が炸裂。

頬を張った右手を振り振り、瑛花が押し倒されたままで笑みを深めた。

「お父さんとの約束、忘れたんですか？　それにそもそも、わたしはそんなの許す気になってませんよ？」

「だって瑛花さん…俺はもう」

「ちよつとでもえっちなことしようとしたら、もう口利いてあげませんからね？」

「で、でも愛情表現……」

「いきなりがつつくななんてサイテーですよ？」

「もう半年も一緒にいるのに……」

「その半年間……あなた、わたしに甘えてばかりじゃないですか。そもそも三十路の冴えない甲斐性なしが、そんな簡単に、こんなピチピチの女の子をモノに出来ると思ってるんですか？　わたしそんな安い女の子じゃありません」

「や、やっぱり俺のことそんなに好きじゃない？」

今にも泣きそうな声で問う時臣の頬を、瑛花はそつと撫でてやる。目を細め、慈愛の表情を浮かべて、

「好きになってきてるって言いませんでしたっけ？」

「でもやっぱり瑛花さんに好きになってもらえる理由が思いつかないし……」

「あなたを好きになってる理由？　そんなの自分でちゃんと考えてください。三十路の甲斐性なしには教えてなんてあげませんから…ふふっ」

「あー。こんな三十路のおっさんなんかでゴメンね……」

興奮が落胆に変わり、時臣は瑛花の上から身を離すと隣に寝そべった。

「前髪後退しててゴメン。冴えない顔でゴメン。甲斐性なしでゴメ

ン。最近腹も出てきてゴメン……」

「そんな風に自分を卑下しないでください。それって、あなたを好きになってるわたしに対してとつても失礼です」

「冴えない甲斐性なしって言ったの瑛花さんじゃん」

「わたしはいいんです。あなたのことを悪く言ってもいいのは、わたしだけ。わかりましたか、三十路の甲斐性なしさん？」

「ううう……ホント、ミソジでごめんなさい」

「今度自分でそれ言ったら怒りますからね？」

「……愛されてるって思ってもいい？」

「だからそれは自分で考えてください」

言つと瑛花は、時臣の身体にぴたりと抱きついた。眼鏡を外しながら言葉を続ける。

「わたしがあなたを好きなんだって、愛してるんだって、自分で胸を張って言えるように自信がついたら、色々考えてあげます」

「……それって」

瑛花の温もりとふにふにとした感触に、時臣は興奮を覚えた。自然とその腰に手が伸びるが、

「ダメです」

その一言で動きを止めた。

瑛花の言葉には基本逆らえない。

なにしろ尻に敷かれているのだし、それを望んでいるのだから。

瑛花がダメと言えば、ダメなのだ。

そんな時臣の特性をしつかり把握している瑛花は、安心しきった様子で身体をモゾモゾと動かす。腕や脚を絡ませる位置を微調整していき、ちょうど良い体勢になったのか、

「知ってます？　わたし抱き枕があつた方がぐっすり眠れるんです」

少し恥ずかしそうにそう囁いてきた。

「愛用のは実家に置いてきちゃってますから、今夜から、あなたが代わりになってください」

「でもお触りはダメ…と？」

「ベッドの中でそんなの許したら、あなたいつか歯止めが利かなくなりそうですよね？」

「…反論できません。でもこれって蛇の生殺しだよぉ」

「色々頑張ってください？」

「目一杯甘えさせてくれるんじゃないの？」

「ん…やっぱり気が変わりました。ダメです？」

「酷ッ?! ウソつきーっ」

「ウソじゃありません。気が変わっただけです」

「うう……」

その後しばらく、二人は無言でいた。

お互いの温もりが心地良い。

そんな中でふと、時臣の脳裏に、

——ああ…結局ちゅーはダメかぁ。瑛花さんの唇、もう一度味わいたいんだけど。よかったなぁ…アレ。

という思いが過ぎった。

瑛花の唇に想いを馳せていると、自然と口が開く。

「瑛花さん」

「はい」

「ファーストキスの相手——こんなミソジでゴメンね」

「次にそれ言ったら引っ叩きますよ？」

二人の寝室に、パシーンっという小気味悪い音が再度響いた。

—END—

第1話(5) ～三十路男と幼婚約者の距離～ (後書き)

色々と無理が多い内容ですが、夢のあるお話が書ければ……. と思い執筆しました。100%作者のシュミと妄想の産物ですw お読みくださった方に少しでも「ニヤリ」と笑って頂けたら幸いです。なお、作中での変態行為につきましては、作者はこれの実行を賛美又は推奨するものではないことを申し添えておきますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8138y/>

ミソジでゴメンねっ

2011年11月24日01時52分発行